「『幼児の教育』史」点景

―一〇〇巻の重み・改題の意図・幻の昭和二〇年一月号―

河合　隆一

『幼児の教育』が一〇〇巻を迎えられたとのこと、おめでとうございます。

雑誌としての大変な足跡であること、教育界に大いに誇っていい数字だと思います。『婦人と子ども』創刊以来、子どもを思う心を脈々と受け継ぎ引き継いでこられた先生方に心からの敬意を表します。

一〇〇巻の重み

先年、私は倉橋惣三年譜をつくりました。未だに資料の発見が続き、完成途上状態なのですが、その作成作業の中で、まずびっくりしたのが、倉橋惣三の雑誌への寄稿の数の多さでした。そして寄稿雑誌の種類の

多彩さには目を見張るばかりでした。当時の教育者の中でもトップ・クラスの寄稿量ではないかとさえ感じられます。まだ完全なトータルとは言えませんが、保育雑誌八、教育・心理学雑誌六〇、児童福祉雑誌七、児童雑誌・絵本七、婦人家庭雑誌二三、総合誌・機関誌・PR誌など二一、新聞一二、合わせると一三八もの雑誌・新聞などに寄稿していたことがわかりました。あらためて倉橋惣三の活動・視野のマルチぶりに舌をまいてしまいました。

これらの倉橋惣三が寄稿した雑誌のうち現在も続いている雑誌がいったいいくつあるでしょうか。

出版科学研究所へ行ってしらべてみました。教育関係雑誌で、なんと創刊以来現在まで連綿と続いている雑誌の筆頭に『幼児の教育』一九〇一（明治三四）年創刊とあるのです。

そして『教育研究』一九〇四（明治三七）年、『学校教育』一九一四（大正三）年と続いていました。一九〇〇年代初頭に創刊されたもののうち、倉橋惣三が寄稿した教育雑誌で現在残っているのは『幼児の教育』と『学校教育』の二誌のみでした。

これだけのデータから見ても、『幼児の教育』は保育界のみならず教育界に誇っていい歴史、存在であると言ってもいいと思います。

ついでながら現在もっとも古くから現在まで続いている雑誌全体からひろうと、まず、『薬学雑誌』一八八一（明治一四）年創刊、ついで、『法学協会雑誌』一八八四（明治一七）年創刊、『国家学会雑誌』一八八七（明治二〇）年創刊、『中央公論』同年創刊と続いています。

それはともかく、倉橋惣三が寄稿した多くの雑誌、特に教育・心理関係の雑誌のほとんどが現在は図書館でしか見られないということに、雑誌の消長は世の常とは言うものの複雑な思いを禁じ得ません。倉橋の恩師元良勇次郎が主宰し、倉橋が『婦人と子ども』にかかわる前は、海外の新しい幼児児童に関する文献を読みこなしては紹介して実力を養っていた『児童研究』、

多くの論文を寄稿していた『教育論叢』『教育時論』、教育ジャーナルとして独自の存在だった『教育週報』など、活発な出版活動を続けていた多くの教育雑誌は昭和一五年ごろから二〇年の間に出版統制、資材の不足などから廃刊、休刊となっています。戦後復刊はしたものの続かなかった雑誌もあります。

こうして見てくると、大変なこの時代を歩み続けてきた『幼児の教育』の一〇〇年の時間の重みを改めて感じさせられます。

改題の意図

『幼児の教育』は『婦人と子ども』から出発し、『幼児教育』に改め、そして現在の『幼児の教育』となってきたことはすでに知られていることです。

大正八年一月号から『婦人と子ども』を『幼児教育』と改題したことは倉橋が「『婦人と子ども』を一つ並にいっしょにするのはよろしくない。おんなこどもという我国在来の古い言葉には、婦人をも、子どもをも軽侮したような怪しからぬ見方がある。（中略）従来のやや通俗的な名称から専門的教育雑誌にしなければならぬ」（『幼児の教育』昭和五年四月号）とその趣旨を後年になって書いています。ここでの改題は専門誌への脱皮でした。

それから五年後の大正一二年、当時の新聞の記事を発見しました。

「東京女高師の日本幼稚園協会で発行していた『幼児教育』と云う機関雑誌を、この七月号から『幼児の教育』と改題して頁数を倍加し一層内容を充実させて協会内部の機関誌とするのみならず社会的にも発展するそうで、十八日夜東京会館に教育界の諸名士や新聞記者を招待して披露した。」（読売新聞・大正一二年六月一九日付）とあります。

『幼児の教育』の七月号を見ると、口絵写真があって「日本幼稚園協会（幼児の教育）拡張披露の集い」というキャプションがついています。東京会館に集まった二二人の「教育界の諸名士や新聞記者」が写ってい

ます。巻頭には、会長の茨木清次郎が「本誌に多少の拡張を加え、従来の稍々狭き機関雑誌の体裁より、聊か社会的活動に進まんとしたのである。」と書いています。

単に「の」をいれただけのマイナーチェンジとも見える改題で、おおげさとも思える披露をした意味が納得できました。

雑誌の内容は、ページ数は倍以上となり、記事も童話、童謡、教材研究、さらには小説までも掲載して編集の幅を広げており、決してマイナーに止まってはいません。むしろ盛り上がる意欲が強く感じられる誌面となっています。

今まで私は、年譜を見るとき、大正一二年『幼児教育』を『幼児の教育』と改題、そして三年後の大正一五年に幼稚園令公布、と表面的にしか見てこなかったのですが、最初に引用した新聞記事と『幼児の教育』の記事と両者を合わせ見ることで、このときの小さな改題の奥にひそむ意図を初めてつかむことができました。

六月一八日夜の東京会館でどんな話が交わされたか、記録はみつかりません。しかし、当時の幼稚園令実現までへの多くの関係者の努力の一端を垣間見ることができました。

幻の昭和二〇年一月号

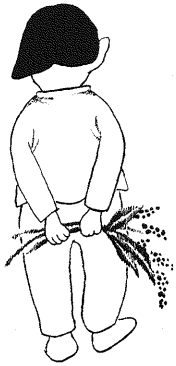
昭和一六年から二〇年の戦争をはさんだ時代、先述のとおりほとんどの教育雑誌はこの期間に休刊、廃刊に追い込まれました。そのなかで、昭和一九年四月号の「謹告」にあるとおり『幼児の教育』が保育関係雑

誌として残されました。倉橋惣三の著作の年譜を見ると、この時期は『幼児の教育』以外への寄稿はほとんどなくなってしまっています。

そして、昭和一九年の一二月号は発行されたが、昭和二〇年一月号から休刊ということになった、と『幼児の教育』の復刻版や他の資料にもあり、私もそう信じていました。

私が『子どもに生きた人・倉橋惣三』（森上史朗著）を担当し、資料探しをしていた最中、倉橋家から、また津守先生から風呂敷いっぱいの資料の提供を受けて誠に感動した日々がありました。（このとき新しく発見された資料をまとめて『倉橋惣三選集第五巻』となりました。）

倉橋家からお預かりした資料のなかに昭和二〇年一月一日発行日付の『幼児の教育』がありました。表紙ともで一八頁のざら紙のぺらぺらの雑誌でした。このときは不明にも、そうか戦争中の『幼児の教育』か、としか思いませんでした。それが著作年譜を作ろうと思い立って『幼児の教育』の復刻版をあらためて見て、はじめて休刊したはずの号であることに気づいたのです。表紙には左端に「倉橋先生」と女性らしい丁寧な文字が書かれています。先生への献本だったのでしょう。目次の文字のみの表紙です。内容は前号から続いていることですが、この時代の国民の錬成といっても幼児の保育ではスパルタ流の硬教育ではないという論、あるいは、幼稚園令の戦時の解釈と実践についての論、また、厳しい時代だから強い国民をつくり倹約の徹底が必要であるという論などなど、戦時下の幼児教育論がのっています。そのなかで、戸倉ハル執筆の「お山の杉の子」（吉田テフ子作詞、佐々木すぐる



作曲）の曲譜と振り付けのページが七ページもあるのが目をひき、ちょっとほっとします。しかしこの歌詞も後半は戦時色濃厚となっています。（ちなみにこの歌は終戦後、戦時色を取り去って平和的な植樹の歌として復活、よくうたわれました。）

この号の存在について何人かの先生方に聞きましたがご存じの方はありませんでした。この号はなんらかの理由で販売されずに終わったのでしょうか。

前年、昭和一九年一二月号には、この号限りで休刊という表示はありません。そして発見された二〇年一月号の巻末には協会の規則、注文規定などが例号通りの形で掲載されていて、ここにも休刊の表示は見あたりません。

この二〇年一月号には「第四五巻第一号」という表示があります。そして復刊された昭和二一年一〇月号にも同じく「第四五巻第一号」という表示があります。この重複はなぜだったのか、などいくつかの疑問がのこります。

保育の研究とははずれたことですが、元編集者として、また倉橋文献を調査している者としては疑問としたいところです。ご教示賜れば幸いです。

以上、狭い私の調査の中で発見したこと、感じたことを書かせていただきました。

最後になりましたが、倉橋惣三という大きな存在への端緒をご教示下さった津守先生をはじめ、沢山の本誌に携わったかたがた、どれだけ編集者としての私に栄養を与えてくださったか測りしれません。有り難うございました。

『幼児の教育』がもっともっと筆者や読者を広げられて、第二世紀も続いていくことを祈ります。

（元・フレーベル館編集部）